令和２年度　初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会

分科会　（小中学校）　第2回　　議事録（案）

日時	令和２年 12 月 14 日（月）16：00～18：00
場所	Zoom 会議
委員	内川 健　　成蹊小学校　教諭 河合 豊明　　品川女子学院　教諭 宍戸 学　　日本大学 国際関係学部 国際総合政策学科 教授【統括座長】 高清水 英俊　宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会 寺本 潔　　玉川大学 教育学部 教育学科　教授【座長】 手塚 美和　　静岡県静岡市立清水有度第二小学校 教諭 新保 元康　　NPO 法人　ほっかいどう学推進フォーラム　理事長【オブザーバー】 （氏名五十音順・敬称略）

１．開会･挨拶

〇事務局・MURC 小森

定刻になりましたので、令和２年度　初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会小中学校第２回分科会を開催いたします。

開会に先立ちまして、参事官の刀根様よりご挨拶申し上げます。

〇観光庁・刀根

本日はお忙しい中、第２回分科会に御参加いただきありがとうございます。新保先生、本日はお時間をいただきありがとうございます。

前回、皆様からご意見をいただき、方向性が見えてきていると感じています。大切な方向性として、文科省が掲げている学習指導要領も大切ですが、そこから一歩踏み出した新しいものを、観光教育で何か作っていければと思っております。そのキーワードとなるのが、「社会との接点」だと感じています。

社会を巻き込んで、子どもたちに良い学びを提供できるような観光教育を、協議会、分科会を通して作っていければと思っていますので、よろしくお願いいたします。

２．討議事項に関する説明

〇事務局・MURC 平川

資料２を説明。

〇玉川大学・寺本委員

よくまとめられていますが、前回の討議で森下座長が、観光を通して豊かに生きる力を育み、

「社会と共に」というキーワードを出されたと思います。「社会と共に」が削除されて、「持続可能な地域社会をつくる」となっていて、これも大事なのですが、このままの文章ですと、教育界が勝手にやってくれるだろうという意味に取られてしまうので、社会があまり関与しなくても、教育界がそういう教育をやってよねというメッセージに受け取られかねないと思います。やはり森下座長がおっしゃっている、「社会とともに」というキーワードを、なんとか入れ込みたいと考えています。森下座長はそういう意図で、教育界だけでは実現できないと思っています。教育界も、もう余裕はありませんので、この観光教育が少しでも普及し始めるためには、学校という世界、あるいは教育界という世界だけに依存しては進展しないと思います。

「社会と共に」社会の力をうまく導入しながら、担い手を作っていくという形で動けないかなと思いますので、森下座長がおっしゃった「社会と共に」のキーワードを大事にできませんか。という提案が１つです。

また、下の方に、「探求的な学び」とあり、“たんきゅう”の“きゅう“が「求」になっていますが、教育界では、きわめるの「究」を使っておりますので、可能であれば「探究」に修正していただければと思います。

〇事務局・MURC 小森

失礼いたしました。寺本先生、ありがとうございました。

森下座長のコメントについては、もちろん踏まえた上で、一案として当社から出させていただきました。「社会と共に」というキーワードをどう使うかというのは、このあと皆さんからも御議論いただきながら、どこに収めるか、少し言い換えた方が収まりやすいのかも含め、改めてご議論いただければと思います。

〇事務局・MURC 平川

まずは、新保先生の話にうつり、後半の部分で今のご議論の続きをご議論いただきたいと思っております。

３．話題提供

①話題提供

〇ほっかいどう学推進フォーラム・新保先生

スライド説明

②議論

〇玉川大学・寺本委員

新保先生、大所高所から観光教育への目的、意義、培う能力、資質などへの示唆にもつながる貴重なご提案をいただきました。MM（モビリティマネジメント）教育が一番最後に出ましたが、実施を担う財団でも、学校教育への支援として、助成金の制度をお持ちのようですので、応募も検討いただければと思います。審査委員には、私も入っております。

この後、質疑応答を 20 分ほど行い、その後、意義、目的、資質、能力について、先ほど平川さんがまとめてくださったものを基にしながら、意見交換を行いたいと思っています。

まず、新保先生のお話を受けて、ご質問等があれば出していただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

〇宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会・高清水委員

新保先生のお話の中には、共感できることが非常にたくさんありました。私の方でも、観光教育ということではなく、協働教育に取り組んでいまして、地域の指導者を学校の中に入れ込んで、より深い学びを提供しているところです。常々思っているのは、教員の理解を得て、受け入れ態勢がないとやっていけないので、そのあたりが非常に悩むところです。

実際に私も教員なので、そういった場面で、子どもたちの変化がすごくあるとわかっていて、私も進んで導入していたところではあるのですが、今後、観光教育も含めて、色んな方の手を借り進めていく必要があります。そのために教員に研修等を行い、理解をしてもらうことが必要ですが、私どもも、色々と事業提供をして、いいなと思ったものに関しては先生方も飛びついている状況ではあります。今後、さらに先生方に、納得、理解してもらうためには、どういった策を講じていくことをお考えなのか教えていただければと思います。

〇玉川大学・寺本委員

新保先生のご発表の中に、社会資本関係と教職員の一同に関する場、というのが非常に印象に残っておりますが、関連して補足の質問等はありますか。

〇静岡県静岡市立清水有度第二小学校・手塚委員

最後にお話のあった、札幌市都市交通課から受注がきたというシステムのお話に、びっくりしました。こんなシステムがあったらすごくいいなと思いました。社会科に観光単元があればどんなに良いかと思って聞いておりましたが、実際にはできないために、地域の中で子ども観光大使の取り組みを行っていたのですが、学校の中に入っていくときには、どうしても先生方の心の問題もあります。なかなか学校に取り組みが入っていくことができない中、こうしたシステムは、どうしたら各地で生まれるのでしょうか。

これは、札幌だけのものなのか、どうすればこのシステムを自分の県・市町に持ってこれるのか、何かご意見があればお聞きしたいです。

〇玉川大学・寺本委員

ありがとうございます。そもそも札幌市が「dec（一般社団法人北海道開発技術センター）」 に発注するという流れを作っていかれたのも、新保先生ではないかと思っているのですが。

〇ほっかいどう学推進フォーラム・新保先生

これは、理事の原と私が出会ったのが 22～23 年前だったと思うのですが、それがすべての始まりです。原は、社会資本関係者だけで頑張っていても、うまくいかないと強く感じていました。一方で私は、学校だけで取り組んでいてもうまくいかないと感じていたのですが、その２人がたまたま出会って、意気投合して一緒にやろうということになりました。

MMについては、まさに寺本先生にお世話になっているのですが、事業は財団からの補助を用

いて、札幌市で始まりました。２～３年経過した後は、札幌市の予算で継続してきています。

もう１つの、雪の方は、最初から札幌市の雪対策室が予算をつけてくれました。札幌市の雪対策室は、予算が年間 200 億あります。ものすごくクレームが来たり、首長サイドとしても、非常に大きな課題なので、これが教育されていないということは困るということで、ストレートにきました。

また、今やっている道学習というのは、国土交通省北海道開発局がやっている事業です。

そういった中、教育の方は、本当にお金が全くないと言っていい状況ですので、あるところからいただき、それをお預かりしながらやっていくということがあります。

重要なポイントが１つあって、原と私で上手くやれたのは、原は徹底的に学校の立場を尊重してくれました。例えば、出前授業が悪いわけではないのですが、それだけではダメで、やはり、先生たちが教えられるようになることが大一番で、先生たちが何を知りたいのか、どうしたいのかについて、非常に関心を持ってやってくれました。先生たちの信用を得たことにより、先生たちがのびのびとやれるようになり、すごく良かったと思います。

〇玉川大学・寺本委員

高清水委員、今後の参考になりましたでしょうか。

〇宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会・高清水委員

ありがとうございます。今回、観光教育も含めて、学校とともにやっていくことがこれから必要だと思った時に、お互いに尊重して取り組んでいくことが何よりも重要なのだということを、地域の方たちに発信できたらなと思っております。

〇玉川大学・寺本委員

北海道に限らず、学校の先生というのは、道や県からはお給料が出ているわけなのですが、地元から出ているわけではありません。これは言い過ぎかもしれませんが、あまり「地元密着」と言いながら、本気になっていない側面もあります。

観光振興も、地方創生も、人口減少社会対策も地域のことなのです　が、学校の先生は、地域立脚の学校だと表面ではおっしゃっているのですが、全体としては大きなうねりにはなっていかないという、このあたりの意識の差があると思います。

新保先生と原さんというキーマンの存在が、北海道は非常に大きかったと改めて思いました。沖縄の場合は、既に 20 年以上前から沖縄観光コンベンションビューローが予算を取って、学校現場に出前講師を派遣する事業を続けてはいるのですが、近年、そのオファーが減少気味です。なぜかというと、学校が本気になっていないことと、優れた観光関係者が出前授業に行くのですが、教員は全部丸投げ状態で自ら学ぼうとしない、「いいお客さんが、いい話をしてくれたね」で終わりなんですね。

実際の業界と接点があっても、学校の先生方が本気になれない、ここにメスを入れる必要がある、そのようなことを仕組みの問題で痛感しております。

宍戸先生はいかがでしょうか。

○日本大学・宍戸委員

非常に感銘を受けました。私自身は、高校で働いておりましたので、北海道の高校の先生方とは今でも、ニセコ高校などは大分お付き合いがあります。北海道は、専門学科としては、観光教育について比較的頑張ってやってきていると思うのですが、小中で実施されているということは、あまり認識がなくて、驚きました。

質問ではないのですが、専門学科では、ニセコとか、札幌啓北商業が高校で SPH などを取られてここ５年ぐらい、観光や MICE をやっていらっしゃいます。私も MICE 関係では、札幌の国際プラザさん等とはお付き合いが深いのですが、MICE の文脈では地元の小中学校に世界的な学者が回るような話を聞いたことがあります。

そういう観点で、小中の授業と観光的な考え方がつながるところはあったように思っていたのですが、先生の実践を知らなかったので、逆に、小中と高校ではちょっと溝があるというか、壁があるように感じるのですが、そのあたりいかがでしょうか。

○ほっかいどう学推進フォーラム・新保先生

私自身が小学校の教員だったので、まずは小学校からということで取り組んでいます。

私たちがよく話すのは、日本マクドナルドの藤田田さんの話で、小さいうちに食わせろ、それが一生の味になるという有名な話があって、やはり小学校段階でちょっと匂いを嗅いでもらうというのは、非常に重要なことで、それでものすごく入ってくるのだろうなと思っています。

北高という札幌の有名な高校があるのですが、今はそこの林校長と接点があり、本格的にやるには、高校だと思っています。ほっかいどう学を高校でやりたいなという夢があるのですが、まだ実力不足で、そこまで取組めていない状況です。今は、仲間づくりを始めているところです。

○玉川大学・寺本委員

先日、北海道の洞爺湖で観光大臣会議が開かれましたが、それをご覧になって、新保先生はどのような感じを受けられましたか。

○ほっかいどう学推進フォーラム・新保先生

恐縮ですが、十分フォロー出来ていません。

聞いた話ではありますが、北海道は、とにかくインバウンドでなんとかしようということで必死です。ただ、地元がそこについて行けてないことが非常に大きな課題だと思います。

問題意識を持っている人たちは、観光大臣会議をやったりしているのですが、実際にそこに住んでいる人たちがそこについて行けていないので、そういう意味でも、子どものうちから教育していくことは重要だと思います。

○玉川大学・寺本委員

新保先生の話の中に GIGA スクールも出てきましたが、河合先生 GIGA スクール関係で、そこに観光題材を入れ込むことの可能性などについてご示唆いただけますか。

○品川女子学院・河合委員

私は、品川女子学院という中高一貫校で教員をしています。

GIGA スクールでいうと、当校では中学１年生から ipad を全校の生徒が持っているという教科でのことになります。

観光に直接つながるかどうかはわからないのですが、GIGA スクール構想（全員がコンピューターを持つ）と関連するところとなると、先ほどお話をしていただいた宇登呂の小学校の例の中に、我がまちの観光資源ではなく、我がまちの観光業を小学生から見てみようということがあって、そこが目からうろこでした。

よくあるのは観光資源を見つけて、それを基に観光企画を考えるということをやりがちで、私も、それをやってしまうのですが、高校生でも同じことで、観光業はそもそも誰が観光業の関係者なのか分かりにくいものです。日常の中でも、観光業に関わることをされている親を持つ生徒でさえもよくわからないようです。どこからが観光業なのかという境目がはっきりしているわけではないと思います。だからこそ、わからない部分があると思います。

我がまちの観光業ということで、誰が観光業の関係者なのかというステークホルダーをはっきりさせることがまず初めにあって、それを理解することが、大事な話なのだと感じました。

それが、宇登呂の観光業に関わる方、東京の観光業に関わる方でやはり違うと思うのですが、そのあたりを GIGA スクール構想であれば、小学生同士、中学生同士でも、同じ状況が作れると思うので、うちの町の観光業に関わっている人はこういう人がいるということについて、小学生同士、中学生同士で話をしてみるだけでも意味のあることだと思います。宇登呂であれば、こういう人たちも観光業だと思っても、網走の人たちにとっては違う認識もあると思うので、そのようにして、我がまちの独自性を見出していき、それが町に対する自己肯定感につながれば、そこに住んでいる子どもたちにとってもやる価値のある観光教育につながっていくのではないかと思いました。

また、先ほど、新保先生が、我がまちの良さを英語で紹介できるという話をされていましたが、コロナ禍で外国から観光客が来られる状況ではありません。

ただ、留学生においては、日本語が流暢な人が多く、将来は日本で働きたいと思っている優秀な人材がいますが、日本に溶け込もうと思っても、他の日本学生と関わる機会がなかなかないようです。学校の授業で専門的なことを話し合うことはありますが、それ以外に機会がなく、もっと日本のことを知りたいので、どうにか繋がることができないかということがあるようです。

そういう人たちに向けて、我がまちを紹介してもらう取り組みもできるのではないかと思います。それも、求められていることなのではないかとお話を伺っていて思いました。

〇玉川大学・寺本委員

ありがとうございました。観光業を学ぶ、観光産業を理解するというのは、観光が非常に裾野が広い産業であるため、なかなかつかみどころがないという難点もありますが、逆に言うとそれだけ他産業に影響を及ぼす、非常に公共性の高い産業だとも言えます。

ここが、観光教育を進めていく大きな意義にもつながるかと思います。また、外国人留学生と日本人を結びつける題材としても観光という話題、戦略も非常にユニークなことだと思います。

内川先生、観光産業も大事な学習内容になるということは、日本地理教育学会のシンポジウムでも当初から挙がっていましたよね。

〇成蹊小学校・内川委員

はい、挙がっていました。

１つ質問しても良いでしょうか。

観光産業とは少し違う話なのですが、全国的に、私学でも若い先生が増えており、学ばない先生が増えている悩みも現場ではあると思います。道内で、ほっかいどう学等の取組みをする中で、指導書まで作られていることが素晴らしいと感じました。誰でもすぐに始められます。

ただ、それがなければ、どこまでそれが読まれていて、新しいものを作ってみたいという先生がいるのか、参加者がどのぐらい増えているのかが気になります。やはり、「〇〇教育」というのは特定の先生がいなくなってしまえば、廃れていく傾向があるなど、そのあたりが不安で、どこまで持続させられるのかをお聞きしたいです。

もう１点、寺本先生も関わっていらっしゃる、観光教育プログラムになると思うのですが、沖縄や宮城や宮崎で、副読本を作ったのに、北海道についてはプログラムに持っていったというのは、実践してもらいたい、人を育てたいというところがあると思うのですが、その反響はいかがでしょうか。道内の一部にとどまっているのか、全道的に広がっていっており、教育の機運が高まっているのでしょうか。

東京から見ると、どんどん北海道の土地が買われて外国資本が入ってきて、北海道がどうなるんだろうという話も聞きますし、文化や観光だけではなく、町という意味でも、観光とのつながりで、皆が危機感を持って考えているのか、そのあたりをお聞きしたいです。

〇ほっかいどう学推進フォーラム・新保先生

内川先生のお話は、大変重要な指摘だと思います。

これまで 20 年やってきた中で一番大切にしてきたことは、すべての先生がやってくれる状態を作りたいと考えていました。学習指導要領には書かれていないのですが、皆がやってくれるようになるにはどうしたらいいか。こればかり考えてきました。

成功していることもあれば、失敗していることも山ほどあります。最大の成功は、副読本に除雪のページが載ったことです。

先生方の質の問題があることもよく存じています。ただ、私も校長としての経験がありますが、アメリカの学校と比べると、日本の先生の質は非常に高いと思います。基本的にまじめです。

私は、難しいことを言いすぎているのではないかと思っています。こちらがもっと目線を下げていって、やさしく語り、楽しくやることがすごく大事なことではないかと思っています。

今、色んな取り組みをしていますが、副読本を作ろうとすると厚いものができてしまうので、それをやめようとしています。普通の単元の中に、1～2 時間やりたくなるようなマイクロ学習のようなものを開発しようという取り組みを始めています。それは、GIGA にもつながります。90 秒程度のビデオクリップを作るなどです。

今までは、どちらかというと、立派な学習を作るということをやってきて、それが１つのステータスでもあったのですが、それだとやはりやってもらえないので、そうではないやり方もあるのではないかと考えています。

○玉川大学・寺本委員

貴重なご示唆、ありがとうございました。その通りだと思います。

文部科学省からも出ているニューノーマル時代の学習環境整備では、GIGA スクールも入っているのですが、令和６年度からの教科書編集の会議が既に始まっており、大幅にデジタル教科書に移行していく流れになっています。教科書の内容が、ページ数の制限がなくなってくるのではないか、つまり、学校や先生が取捨選択をして、資料や画像を活用していくといった教科書活用になるのではないかと想像されます。

そんな中、観光教育もそこに早めに乗り込んでいかないと、選ばれない題材になるという危険性もあります。これを、グッドチャンスと見るかどうかですね。紙メディアの冊子の教科書も、令和６年度に発行はされると思いますが、ほとんどがタブレットになり、動画も活用できるようになっているので、教科書を丁寧に教えるという日本の文化がかなり変わってくるのではないかと思っています。

このあたりで、観光教育の「意義・目的」についての議論に入りたいと思います。

４．意見交換

①観光教育の「意義・目的」について

○玉川大学・寺本委員

前回の分科会である程度の意見が出ており、アンケート調査でも多くのことが列記されていますがどうでしょうか。

観光教育の意義や目的は、今日の新保先生の話では、人口減少社会に立ち向かっていくときの地方に必要な視点が出て参りましたが、東京・名古屋・大阪のような大都市圏は、残念ながら人口減少がピンとこないようです。黙っていても、国内外からもたくさんお客さんがきて全然困っていないわけです。むしろ、オーバーツーリズムで、いやだなという意識もあります。

人口が集中している大都市部と、過疎が進む地方との大変な意識の差、人口減少社会を怖がる教師がいないと先生がおっしゃったように、その問題意識がまだ地方の教師には足りないと思います。

観光教育というのは、将来の日本の行く末に不可欠な学びとして、どう訴えていけば、意義をたくさんの方に理解していただけるのか、この点につきましていかがでしょうか。

○静岡県静岡市立清水有度第二小学校・手塚委員

先ほど、寺本先生が、いっぱい広がったとおっしゃったのですが、どれも大事で、今日示していただいた観光教育の目的の中にもたくさんいい言葉が入っていて選べないのですが、地域にとってではなく、子どもにとってということで考えていくということでいいんですよね。

○玉川大学・寺本委員

第１にはそうですけれども、子どもも地域社会と離れては育成できないという側面もありますので、キャリア教育とも関連すると、社会や産業界についても早期に子どもの時に理解してほし

いですよね。色んな思惑が込められています。

〇静岡県静岡市立清水有度第二小学校・手塚委員

地域のことを考えると、地域が観光によって光が当たったことによって、そこからブランディングされていき、地域がより魅力的になっていく、僕たちの魅力はここなのだと他の地域の人たちが認めてくれたことによって、より自分の地域の魅力を高めていくことができるのも、これからの未来を作っていく上で大切なことだと思います。

どれも大事で、全部並べて良いのであれば、並べたいです。

〇玉川大学・寺本委員

地域の魅力に関しても、小学校段階ぐらいは、あれもこれもいいね、という感じで、ランキングや絞り込みができない学習が展開して、いわゆる自己満足の「良かったふるさと学習」になってしまうんですね。

でも、観光教育をより磨いていくためにも、地域の魅力を価値に変えていく視点、１ランク上に上げないと新しみがないと思います。

その価値が何かというと、他地域にはない固有の良さですよね。その価値を引き継ぐ産業の担い手として、自分も役に立ちたいという社会貢献意識とか、社会形成の一翼を担いたいと思うようなキャリアや意識につなげていかないと、地方は非常に困窮していくと思います。

そういった狙いがあると思いますので、地域の魅力再発見学習で留まると、よかった探しで終わってしまうわけですね。それを、特に、小学校の高学年、中学生ぐらいの段階になると、より高めていく方法が求められると思いますが、内川先生、河合先生、小中で実践もされてきたと思いますがいかがでしょうか。地域の魅力あるいは日本の魅力を価値に変えるという視点では、どうお考えでしょうか。

〇成蹊小学校・内川委員

まさにその視点だと思い、うなずきながら聞いていました。実践の先には、地域の魅力を価値に変えるというところにつながっていかなければいけないと思います。

出された意義、目的の中で少し考えていることがありまして、観光教育の目的の大きなところは「持続可能な」というところはこの前もこだわったところなので、そこについては入れてほしいと考えています。

その下のところに、観光分野への興味関心を「自分ごととして喚起」とあるのですが、観光分野というのが、あまり明確でないと感じます。ただ、観光産業とはっきりと入れてしまうと具体的すぎてしまうし、「自分ごととして喚起」という言葉が、なかなかイメージがつきません。かといって、他の案も思いつかないのですが、今の表現はストレートすぎるような気がします。

もう１つ、その下に、他者理解や社会課題の対峙の経験を通じてとあるのですが、「他者理解」というのは、観光を通じて人と結びつくということでの他者理解もあるとは思うのですが、文言自体に、「国内外の社会に」というぐらいで、「外国」という言葉は入っていません。そうすると、異文化理解とか国際理解という言葉は、他者理解の中に含められるのかどうか気になります。

また、「ワークライフバランス」という言葉が小学校教育ではなじみがなくて、「余暇」等の言

葉に変えてしまうのですが、これが一般的に高校まで通じる言葉であればいいのですが、そのあたり皆さんどう思われるか、ご意見をうかがいたいと思いました。

〇品川女子学院・河合委員

主に、高校のことになってしまうかもしれませんが、「地域理解」という言葉はあるのですが、自分の住んでいる地域のことだけが分かっていればいいとすると、これがいい、これがいいと羅列して終わってしまうことになると思います。やはりどこかで他と比べるというところの視点が必要だと思います。

それが小学校でなのか、中学校でなのかは分かりませんが、おそらく「地域理解」が段階毎にあって、その後「国土理解」という形で、他の地域を理解することにより、自分が住んでいる地域の特色を知るという形がいいのではないでしょうか。国土という言葉が出てくれば、地理関係の先生方は飛びつくかもしれません。

内川先生からは「異文化理解」という言葉もありましたが、「自文化理解」、自分たちをそもそも知ることも必要で、自分たちの町に何があるかを一旦整理するという視点がすごく重要だと思います。それが曖昧なまま行っていき、課題の掘り下げが進んでいくと、アイデアを羅列するだけになってしまうという点は確かに気になりましたので、そういう意味では、ステークホルダーを整理するという視点がどこかの段階で必要だと思います。

〇玉川大学・寺本委員

「自文化理解」ですね。北海道民の北海道知らずということは、新保先生からもご指摘がありましたが、例えば世界の中の北海道の個性と言いますか、それを確か戦略にしていたのではないでしょうか。

〇ほっかいどう学推進フォーラム・新保先生

先ほどの総合開発計画もそうですが、まさに「世界の北海道」をテーマに今やっています。

皆さん、ご存じかどうかわかりませんが、今、ヨーロッパからニセコに来る方が増えています。スキーヤーに聞いた話ですが、世界中のスキー場を滑った結果、一番いいのは、札幌からニセコにかけての雪だと、こんないい雪はないというんですよね。それがじわじわと広がり、それがブランドになっているようで、それは私たちも知りませんでした。

日本国内でもそうですが、やはり比較することで、自分の位置が分かりやすくなります。絶対的な価値もあるとは思いますが、相対的な価値にも気づいていく、それが、稼ぎの種にもなるし、自分の守るべきものにもなるのではないでしょうか。

〇玉川大学・寺本委員

宍戸先生、観光学の観点からはいかがでしょうか。

〇日本大学・宍戸委員

先ほど話に出たように、高校生に教える時も、地域理解教育や郷土教育をする時にも、いきなり地域を学びましょうと言っても高校生は興味を持たないので、外を見ていくためにも、地域を

見て知っていく、逆に、外を見ることによって、地域が見えてくるということもあるので、今のご指摘は非常に重要だと感じました。

どこに入れたらいいかは要検討ですが、他者理解とか、自文化理解だけではなくて、グローバルな理解、世界に目を向けるということ、総合的に自分が住んでいる地域と他地域を比較することは、自分の成長や地域の活性化のために必要なことだと思います。両方を見ていくようなスタンスは、個人の成長にとっても、観光が持つ力の中でも非常に重要だと感じました。

今は、そのあたりが意義目的のところに感じられないので、魅力を理解して、愛着を持ち、誇りを持つというところや、関わりと課題解決というようなところになっているので、もう少し視野が開けていくような言葉があれば、それを入れていただくと良いと思いました。

〇玉川大学・寺本委員

視野が広がっていくようなニュアンス、言葉、誰か出していただければと思います。

いわば自分が住んでいる地方と日本の魅力、さらに世界の中でどう位置付けるかという、入れ子構造の中で私たちは生きているわけです。そういった広い視野から、自分の文化や地域の魅力を価値というレベルまで研ぎ澄ませて考えることができるかどうか、また、観光産業や地域の観光関連に携わっている方々、あるいは一般の人たちが、いかに自分の地域の観光水準をあげようと努力していくかということを学びつつ、自分も参画していこうと、そんな次世代が育成できたら日本の未来も少しは明るくなるのではと感じています。

〇宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会・高清水委員

指導していくのはやはり教員だと思うと、現代では、どうしてもマニュアル化が進んでいて、限られた情報の中で決められたことをやっていくことになってしまっています。

そこに教員が、この意義・目的を解読して、自分のものにして子どもに与えていく形を取っていくためには、どんな言葉が必要なのか考えているところです。

ただ、さらに広げるような文面になっていくと、逆に先生たちがまとめづらいのかなという思いもあり、今は的確な言葉が思いつきません。

あまり広げすぎてしまっても、逆に先生たちを苦しめていく可能性もあるとは思います。

〇玉川大学・寺本委員

先ほど、令和６年度の教科書がデジタル化になるということを話しましたが、新保先生が今後の戦略で、短いビデオクリップのような動画コンテンツをたくさん作っていくのが戦略だとおっしゃっていました。先生たちが気軽に興味を持てるような、コンテンツ集と言いますか、そういうものがあると、使ってみようと思うのではないかと思います。

この協議会も、次年度以降は、教材開発、プログラム開発も念頭に置いていまして、インターネット環境の整備とも相まって、まず取り組まれなければいけないのは、地方の地域理解や観光資源理解に通じる動画コンテンツが圧倒的に不足しているのではないかと新保先生がおっしゃっていました。

北海道の場合は美しい観光地の動画が氾濫しているのですが、どういったレベルの資料が今後必要となってきますでしょうか。

○ほっかいどう学推進フォーラム・新保先生

念頭にあるのは、やはり小学生なのですが、おそらく全国標準的な学習については、デジタル教科書をはじめ、子どもたちが理解しやすいコンテンツはある程度提供されています。

ただ、地方では大人向けのものしかなく、子どもたちには意味が全く分かりません。また、検索能力もあるのですが、私が検索しても、いい情報に辿りつけないのが現状です。そのあたりをハンドリングして、小学生でも辿り着けて理解できるようなコンテンツが、山のように必要だと思います。

それを作るにはお金もかかりますし、アイデアとしては、高校生の学習で、小学生に分かるような教材を作るコンテストをすると面白いのではないかと思っていまして、仕掛けてみようとしています。

もう一つはユーチューバーです。今は、ネット上にオンライン授業が山ほどあります。非常に分かりやすくて、非常に面白いです。

GIGA スクール構想により、どのようなコンテンツが生まれてくるか分かりませんが、ユーチューバー等を教育にはなじまないものとして排除するのではなくて、むしろ、活躍してもらえば、観光では特にいいのではないかと思っています。

面白いコンテンツを出してもらって、それが適しているかジャッジすることをしてもいいのではないかと思います。これは、新たな場なので、ちょっとした知恵が必要なところかなと思います。

○玉川大学・寺本委員

宍戸先生、観光甲子園とかは行われていますが、あれは実社会において大人向けに自分たちの学習成果を発表する場になっていますが、新保先生のお考えでは、逆に、地元の子どもたちに自分たちの旅行商品企画をわかってもらえるような動画をプレゼンするという発想ですが、そういった可能性は高校生側にありますか。

○日本大学・宍戸委員

十分あると思います。例えば、高大連携を見ると、大学のゼミ生徒が、高校生に街歩きのガイドをしたり、音を伝えることはよくやっています。

高校でも高校生が中学生を教えるなど、オープンキャンパスの時などに、中学生に勉強を教えるとかはあると思うので、それは、上の子たちにとっても、いい学びの機会になりますし、下の子にとっては、分かりやすい内容になると思います。

観光甲子園については、元々は、街づくりや地域活性化の取組を、地域と高校生が一緒になって行っており、それをプレゼンという方法で取り組んで、実際にそれを実現化するような方向だったのですが、今は割とたくさんにリーチするということと、デジタルマーケティングのような発想で、観光 PR コンテストになっているのが事実だと思います。

旅行客に魅力的に見えるということと、学習者が理解しやすい、関心を持つということは、多少違うところがあると思います。

十数年以上前になりますが、立教大学が観光庁からお金をいただいて、観光のデータベースを

どうやって構築していくかという研究をしていたことがありました。大学で、観光学を教える時に、世の中にインターネット素材はたくさんあって、オンライン授業を行う場合に、授業の教材として、YouTube とか動画をたくさん使っているのですが、大学でいうと、アカデミックな議論とか、どのように観光地を見るかとなった時に、教えたいことと存在する資料が一緒ではないんですよね。

我々は、画面を見てほしいわけではなくて、例えばそこにある文化的な背景や作っていく過程に起こった葛藤など、そのようなことについて語っているデータベースはほとんどないので、私たちの結論は、研究者や教員が、そういう観点で動画や資料を作って構築して、お互いに共有できるようにするしかないねという話で考えていたのですが、お金がなくなって辞めてしまいました。

ただ、そういうものはすごく大事で、教育の視点とは違うところから教材にアプローチをしていくので、動画コンテンツ等は、小中学生でできるかどうかは別ですが、教員たちが作っていくものを、いかにシェアしていけるかという仕組みづくりがあれば、動画コンテストや、教員の教材のシェア等、もっと進んでいく時代になるのではないかと思います。

〇玉川大学・寺本委員

小中学生という次世代をどう育成するかということで、社会との関係性、社会とともに観光を通して豊かに生きる力を育むというテーマである、観光関連産業と教育界を結びつけるという水平的な横のつながりに加えて、学齢の異なる子ども同士が縦に垂直につながる観光題材としてのパイプもやり始めないと、観光教育における発達段階に伴って育てていくという視点は、十分ではなくなると感じました。

教育界では有名な、スコープとシークエンスの話ですね、領域と系統といいますか、縦軸と横軸の両方を常に考えつつ、産業界、社会との関連も考えていかなければいけません。

大変に複雑で現代的な要素を絡めながら、その良さをピックアップして、束ねて、観光教育が差別化されて、他の教育より抜き出た形にならないと埋没してしまうだろうと感じました。

その他、これだけは言っておきたいことがあればお願いします。新保先生、いかがでしょうか。

〇ほっかいどう学推進フォーラム・新保先生

本日は、貴重な場をいただきありがとうございました。観光庁のビデオを見ましたが、非常によくできていると感じました。一方で、典型的だと思ったのが、二人の先生がどういう授業をしようかと議論しているシーンです。あれが今までのスタイルなんですよね。色々あっても、最後は先生方で考えてしまうという世界です。

そこから一歩踏み出す時に、指導案も授業に合わせて、思いっきり簡単なものにしようと思っているのですが、そこの段階で観光業の人たちと我々が一緒にやるような形で、実際に教育として教える場面は先生がやるという形で、そのあたりがポイントかと思います。

また、観光教育だけに限らないと思うのですが、もう少し、社会科の中で経済の話をきちんと入れていかないと、美しい話ばかりで、日本がその通りいけば良いけど、もうそんな余裕はないので、経済をきちんと教える中で、観光ということも重要なのかなと思いました。

○玉川大学・寺本委員

指導案の簡略化は同感です。それから経済の視点をもっと社会科に入れる、それもその通りだと思います。今後 30 年間で、３万の日本の集落が存続危機集落に陥るという発表があります。地方は大変な状態なんですね。

そういうことを真剣に考えている学校教育関係者が何人いるでしょうか。

その中で、観光教育は一筋の光になるのではないかと私も信じています。すべての地域を救うことはできませんが、少しの光にはなると思っています。

○品川女子学院・河合委員

長野県で信州学というものを総合学習でやっていて、オープンキャンパスでやってくる中学生に我が町を紹介していることがあるのですが、高校生なので、自分たちが住んでいる地域のデータをきっかけに見てみよう、全国のデータと比べてどうかということをやられています。ゴールが必ず決まっているらしく、産学官のどこかと絶対に連携をして、自治体に陳情するところを最終的なゴールとしているようです。なぜそれをゴールにしているかというと、高校生が、地元の役に立ったと思えるところにつなげていると伺ったことがあります。

誰かの役に立つ、地域の役に立つというところについて、資質能力の部分につながってくる話かもしれないが、１つの視点として必要なのではないかと思いました。

○玉川大学・寺本委員

地域貢献意識、地域貢献能力を高めていくというご指摘でした。他にはいかがですか。

○静岡県静岡市立清水有度第二小学校・手塚委員

前回、ギャップがあるという話を伺って、そのあと、授業を作りました。

日本人が考える、外国人が来たくなる都道府県と、実際の訪日数が多い都道府県を比べた時に差があるというところから、日本人に何が求められているのかというところから始めて、自県の魅力だと思っているところとは違う、他県の人から見た時にどこが魅力だと思われているかを学ぶためにはどうしたらいいかと思って、今までやったことのある、自分の地域の発表をするというところを、リモートで他の県とつないで話し合うということをこれからやってみようと思っています。

先ほどお話しされていたように、それをブランディング化して、価値に高めていくような授業・交流にまでするには、自分の地域の魅力を挙げて観光の PR をしたところに対して何か言ってもらうだけでは価値の違いを見つけられないので、そのあたりをもう少し勉強して、追究したいと思います。

○玉川大学・寺本委員

観光の成立要件として、観光資源の魅力化、サービス、交通の整備、これらが重要な３項目であり、これらの視点で違いを見てあげると、観光客から見た人気のある観光地や観光資源が見通せるようになるかと思います。

○成蹊小学校・内川委員

個人的な興味ですが、昔、JTB が出したカリブの観光情報を見ると、新保先生がおっしゃっていたような経済の観点がすごく出てきます。自分の国がどれだけ観光産業で地域（利益？）を出しているか、それが経済の点だったり、観光保全の点だったり、地域について構造的に見ていく視点があって、そうするとやはりお金のことは避けられない、むしろそれを理解した上で、そのために何ができるかを考えていき、地域貢献や役に立つという話に結び付くと思います。

私は他の大学の先生と一緒に、観光のまなざし論という論文を書いていましたが、観光産業というものも、目標は資質には入ってきていませんが、産業としての捉えも入ってこないと、理想だけになってしまうので、観光が及ぼす影響も合わせて地域理解につながっていくと思うので、それは入れてほしいという気がしています。

○玉川大学・寺本委員

本日は、新保先生から、20 年以上に渡る北海道の蓄積のある努力によって、色んな仕組みができていることを知りました。そして、北海道が置かれている近未来の状況を考えると、今、人材育成や教育に着手しておかないと、北海道の明るい未来は開けないと思います。

2030 年に北海道新幹線が札幌まで開通予定で、明るい未来ではあるのですが、それを待っているだけでは、北海道はそれ以外との地域との格差が非常に広がりつつありますので、新保先生も、それを心配されているのではないかと思います。

北海道だけに限らず、大都市と地方との間を行き来するワーケーションや移住も、今、非常に注目を浴びているように思います。働き方改革も含めて、日本の中で生きていく、外国と付き合っていく、日本の魅力をどう高めて行ったらいいのか、これは、国民各層で考えていく大きなテーマになると思います。そのための基礎的な能力を、この観光教育が部分的に担えるのではないかと感じました。

新保先生、今日は本当にありがとうございました。

○事務局・MURC 平川

本日はありがとうございました。ご示唆のある議論をいただき、感謝申し上げます。

自地域と他地域を比べるという視点が重要と感じましたので、それが伝わるような表現を検討していきたいと思います。

２点、考えた意図としては、観光教育の意義・目的についてですが、自地域と他地域を比べる視点が重要だということで、意義として、過年度検討いただいていたことは、「郷土への愛着と誇りを持ち」という間に、「各地域」であるとか、「国内外の社会」といった文言をチャレンジ的に入れさせていただいたのですが、もっとこの部分で「自地域と他地域の比較」といったニュアンスが観光教育を見ていただく方になんらかの形で伝わるような表現等を意識したいと思います。

もう１点、「ワークライフバランス」という表現がピンとこないというご指摘はその通りなので、検討したいと思います。

キーワードとして、「価値」という言葉が出てきたと思います。価値ってなんだろうと考えた時に、１つこの中で仕掛けとしているのは、観光教育の目的として文章としている部分です。「様々な立場で他者や社会へ貢献する力」、ここで、価値を誰かの役に立つことと捉えて、ここでは価値

へ昇華させるといった時に、自分として、観光地として、「他者や社会へ貢献」といったところのステージまできて、初めて誰かの役に立てる、つまり価値に昇華するのではないかというところで、この一文は考えさせていただいておりました。

今日いただいたご議論を踏まえ、しっかりと文章化して、漏れがないように検討したいと思います。また、広げすぎると学校の先生の立場を思って作ったものが、そうでもなくなるという意見もいただきましたので、色んな視点から事務局、座長の先生方を中心に検討していきます。

最後に 10 分程度お時間の延長を許していただけるようであれば、p10 の発達段階別の資質・能力をどう考えていったらいいか、具体的でなくてもいいので、方向性についてのご示唆がいただければ簡単にご意見いただけるとありがたいです。

〇玉川大学・寺本委員

小学校段階では、どのような能力まで高めておけばいいのか、中学校でもどうか、という視点ですね。新保先生は校長職として長いのですが、いかがでしょうか。

〇ほっかいどう学推進フォーラム・新保先生

出来そうな気はしますけど、口で説明するよりは、一回書いてみたい感じですね。

〇玉川大学・寺本委員

昨年発表した観光教育の５つのコンテンツという論文の中に、私自身、一覧表を作っています。小学校４年生以上と、中学生期、高校生期と一覧表があるのですが、そのあたりをたたき台にしていただけるといいかと思います。

これは、第１回の協議会の参考資料の中についています。

〇事務局・MURC 平川

他に、作業方針としてアイデアがある方はいらっしゃいますか。

〇成蹊小学校・内川委員

課題解決の力は、学校ごとに、発達段階で分かれていていいと思うのですが、分かれていくものなので、横並びじゃない方がいいかもしれません。

ライフデザインの力については、小学校から高校まで一貫で横並びでいいと思います。

小学校段階から、ライフデザインを意識していく上で、観光は非常に役に立つのだという形で示すことはいいと思いました。

〇静岡県静岡市立清水有度第二小学校・手塚委員

以前提出した資料の中に、私が書いたことは、理解する、誇りを持つ、国内外の社会の関わり等に含まれていくと思うのですが、観光に関する知識を知るということと、自分のことを、表現する、伝えるということと、資源を使って何ができるか創造すること、それから先ほどのサービスということに関係するようなことの小学生版として、最低限のおもてなしのスキルのようなことについて学ぶこと、また、実際の地域の座学だけではなく、地域に出かけてみて活動すること、

地域の社会の人と出会って、交渉したりお話ししたりするということについて、課題解決の力のところは、小学生のところに書きました。

〇品川女子学院・河合委員

どの段階で何をとはっきりと分けるより、この学年としてはメインとして何を身につけさせますという形であれば、当校であれば共通してあるかと思います。

小学校もそれでいいのかはわからないのですが、少なくとも、何年生までにはこれができるようにというのは、能力のところだけですね。先ほどの内川先生のお話にあった、ライフデザインの力というのは、ここという区切りがあるわけではないと思います。

もう１点、どこまでの地域（範囲）を見るかというところですが、小学校段階では、そんなに広く、世界全体をというところはちょっと違うのかなと思います。中高生になった時には、自分の地域だけでいいかというと、それも違うと思うので、どういう切り口でどこまでの範囲を見るか、そのような分け方をしてもいいのではないでしょうか。

〇玉川大学・寺本委員

マトリックスでこの箱の中に埋めていくというこの表現方法にこだわらずに、内川先生がおっしゃったように、矢印の太さが年齢発達に伴って、段々と太くなっていくとか、あるいは、スパイラルモデルとかもありますが、この１種類だけで入れ込むというのは、むしろ無理があるのではないかということで理解していいでしょうか。

〇宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会・高清水委員

私も、箱で括ってしまうと、そこで途切れてしまっている印象がありますので、積み重ねていくということを象徴していきたいと思っています。

〇玉川大学・寺本委員

小中高の積み上げスパイラルでもいいですし、積み上げが、点々で専門学校としての商業科として入ってきた場合、この専門教育が生きてくるのではないかと思います。

宍戸先生、専門教育の欄につなげていくときには、小中高の積み上げからどう描いていったらいいでしょうか。

〇日本大学・宍戸委員

高校で言うと、専門教育と普通教育では重なる部分と分かれている部分があり、今回は＋（プラス）になっていますが、少し違う印象もあります。

おそらく、小中学校でも、キャリア教育や地域産業の活性化を考えた時に、観光は非常に重要なツールになるので、そういう意味でどんな産業に就職するにしても、見る目を養う上で役に立つと思います。その点で、専門教育が別にあるという形ではないと思っています。

一方で、専門学科では、職業人の育成や、プロフェッショナルの育成という観点があるので、そこは明らかにカリキュラムとして成立していきますので、そのあたりは違うやり方があると思います。

皆さんがおっしゃるように、区切るよりは、段階的に広がっていくのか、濃淡があるのか、当然、小学生と高校生などでは、グローバルな視点に差異が出てくると思うので、もう少し上手い整理の仕方があるのではないかと思います。

ただ、その時にいつも悩むのは、普通科教育の中の観光教育というのは、いわゆるツールとしてだけ考えていればいいのかというと、そうではなくて、ツールとして観光教育を使って、教育に役立てる視点もあると思います。ただ、どうしても切り離せないところがありますので、その教育の中で将来を考えるとか、自分の地域の産業経済とか、地域の継続や持続性を考えた時に、専門性とは切り離せない部分がどうしても出てきます。

そのあたりをどう描くかが、実は一番大切な気がします。うまく分けつつも、見た方が、観光教育の持つ広がりのようなものをイメージできればいいなと思い、いつも見ています。

○玉川大学・寺本委員

よく、小学校などの研究構造図などで使われるのですが、小中高、専門教育が竜巻型のフレームの中で、スパイラルに学んでいきながら、総合的学習のコンセプト、デザインも、情報収集、課題設定、分析などで回っていくので、そのようなイメージで、竜巻型のフレームワークでグランドデザインを整理してみるのはどうでしょうか。

それでやってみるということでいかがでしょうか。

○事務局・MURC 平川

事務局としてはやらせていただきますが、分科会の皆様はいかがでしょうか。

○事務局・MURC 小森

では、一旦事務局で、今のお話を受けて引き取らせていただきます。

○事務局・MURC 平川

もう１点確認ですが、観光教育は大きく２つの流れ、括りができるということでやらせていただいておりまして、必ずしもこの２つでスパイラルを構成するというものではないと思いますが、意義として、大筋の部分で、このような整理の仕方をしてもよろしいでしょうか。

○玉川大学・寺本委員

いろいろなことが盛り込まれていますので、あとはどう精選し、インパクトのある言葉を使うかテクニカルなところかと思います。

○一同

異議なし

②観光教育で育む「資質・能力」について　（約 30 分）

５．事務連絡【５分】

〇観光庁・刀根

非常に充実した議論をいただき、言葉が出ない状況ではあるのですが、最後に新保先生がおっしゃっていた、20 数年やっている中で、一番大事にしていることが、すべての先生にできるようにするまでやるということが、すごく心に響いています

観光教育は新しいものなので、学校現場から離れて、格好いいことをやってやろうとなってしまいがちなのですが、公立、私立、地方関係なく、先生方お１人ずつに納得いただけるようなものを、時間をかけてしっかりと作っていかなければいけないと思いました。

〇事務局・MURC 小森

お時間を延長してしまいましたが、今日の分科会、多彩な議論をいただきありがとうございました。

今週末に専門科、週明けに高校の普通科の分科会があります。年明けの 1 月 19 日（火）を第３回の分科会として、合同で実施させていただきます。

コロナの状況によりますが、第３回は最後になりますので、可能な方は、当社の会議室をご用意させていただいていますので、皆様に集まっていただく対応も可能です。

合同になりますので、統括座長ということで宍戸先生にお願いすることになると思いますが、その他の座長とも合わせて進めさせていただくことなると思います。

今日いただいた議論は、スパイラルの形でものを作っていくということで、高校の専門科、普通科の方でもご案内させていただきながら、1 月 19 日（火）に向けた資料を作っていきたいと思っています。

ご意見は可能な限り反映させていただき、座長、委員の皆様に納得していただける形に仕上げて、今年度の業務の締めとしていければと思っています。

〇玉川大学・寺本委員

１つ質問があります。

３月に行われるワークショップという表現をされていましたが、これが事実上、今年度最後の外部発信となりますでしょうか。

〇事務局・MURC 小森

はい。現状、第３回の協議会を 1 月 19 日（火）に実施し、その後、最終調整中ですが、2 月 17 日（水）が第２回の協議会となります。

その後、3 月 13 日（土）を最終的な目途に、オンラインワークショップという形で、全国の先生方にご参加いただき、実際にどういうテーマで行うかは分科会の意見も踏まえてになるのですが、今日最後にお話のあった、どういう取り組みで、どういう方策にするかというところが一番考えやすいと思います。

協議会のとりまとめを踏まえて、ワークショップにかけていくというところを実施していきます。

〇玉川大学・寺本委員

ワークショップのイメージは、小さいグループに分かれて、何かを討議したり、新たなものを生み出すというイメージがあるのですが、そういうイメージですか。

〇事務局・MURC 小森

はい。この業務の仕様書では全体で 100 人でやるという形になっています。100 人で 1 つの議論はなかなかできないので、ZOOM のブレイクアウトルームの機能を使って、何人かのグループを作って、その中で議論をして、最後共有して成果を導き出すという流れを模索しています。

このあたりのご案内も、今後させていただきますので、よろしくお願いいたします。

以上